

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第124回

日本美術における戌：犬—千支シリーズ

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

群馬県の境町剛志天神山古墳は、動物の埴輪が多種埋葬されていたことで著名である。広瀬川の右岸に位置し、西暦6世紀後半と推定される。国指定重要文化財となっている《犬》■01は高さ47cm。首輪を帯び、口を半ば開いて舌を覗かせ、尾を巻いているところから、飼い犬だったものと推測される。だがこうした愛玩動物あるいは獵犬として飼育されてきた犬の図像を辿ることは、容易ではない。舶来品の猫が宮中などでも珍重されたのとは異なり、犬はわざわざ絵画に描いて残すには、あまりに身近でありふれた存在だったのだろうか。

忠実なる僕あるいは、点景の脇役？

仏教伝来以降の涅槃図には、多種多様な動物たちが登場するが、それが正確にいつの時代からの事なのかは詳らかにしない。残存する著名な例を瞥見するに、京都市東山区の本法寺にある、長谷川等伯(1539-1610)の《佛涅槃図》(1599)(793x522cm)には、象や虎、駱駝、孔雀や鳳凰などの珍しい動物たちの傍らに、猫のほかにシェパードと思しき犬も、画面手前に見える。だが群像のなかで、とりわけ目立つわけではない。東福寺の明兆(1352-1431)によると伝えられる、さらに巨大な涅槃



■01 埴輪《犬》 東京国立博物館 群馬県伊勢崎市境上武士出土 高さ47.1cm 古墳時代 6世紀

図(1450×730cm)は、虎の尻尾の右わきに猫を添えて描いたことで著名だが、ここには犬の姿はないようである。

いわゆる水墨山水画の流れをみても、犬は人物たちに点景として添えられる程度の扱いでしかない。伝雪舟(1420-1506?)の《琴棋書画屏風》(永青文庫)には、囲碁に興じる人々の前に、それを見守る犬が座っているのをご存じだろうか。だが著名な《四季山水図巻》の市中の雑踏を仔細に眺めても、犬の姿は一匹も確認できない。犬を必要とする画題といえば、《桃源郷》を挙げることができようか。陶淵明の『桃花源詩』には「鶏犬互鳴吠」とあり、王維の「桃源行」には「日出雲中鶏犬喧」とみえる。それを受けてか、呉

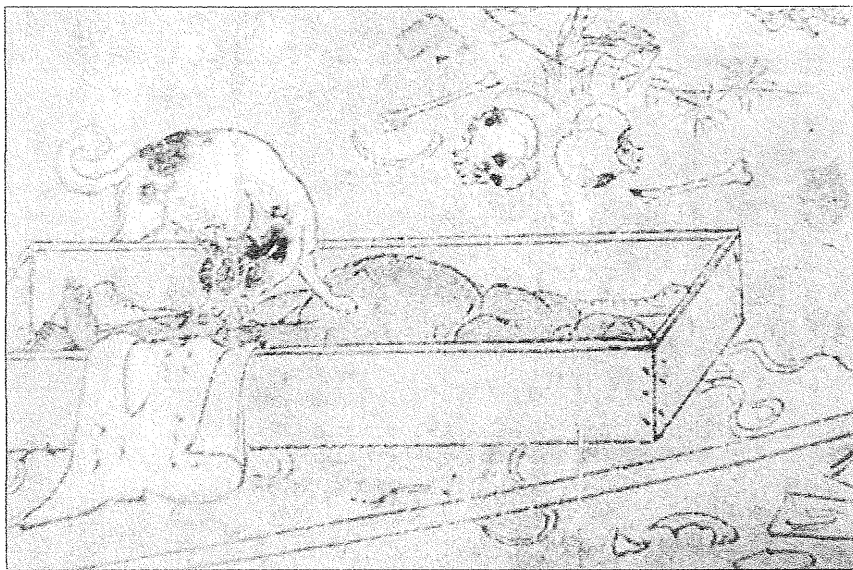
春（1752-1811）の《武陵桃源図》（重要文化財）でも、漁師を迎える人だかりには、一匹の白い犬が付き添い、やや離れた村の入り口あたりの家の軒に見えるひと番いの鶏と呼応している。

不浄なる犬畜生？

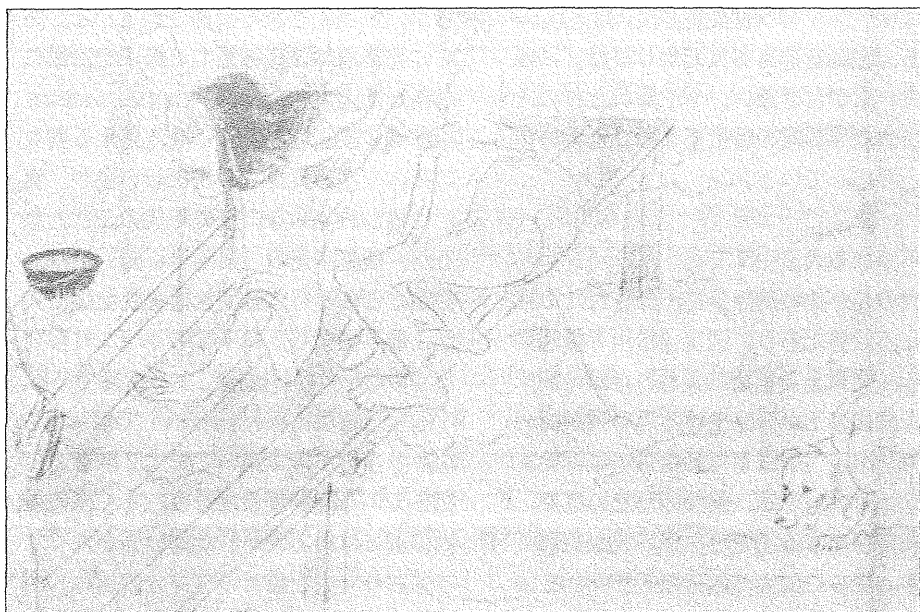
犬の姿が比較的頻繁に記録されたのは、むしろ絵巻だろう。国宝《粉川寺縁起》（12世紀）には全身疱瘡に覆われた娘の病床を、縁側の下から見上げる黒い犬が認められ、国宝《華嚴宗祖師絵伝 義湘絵》（高山寺・13世紀）では、善妙の邸宅の庭で、独楽遊びをする幼児と白黒の犬が戯れている。さらに国宝《餓鬼草子》（12世紀・東京国立博物館）■02には、棺桶の死体を貪り食う餓鬼の傍らに、そのご相伴に預かる犬も登場する。《病草子》（12世紀、京都国立博物館）■03には霍乱（嘔吐と下痢）に悩む女性の排泄物に集る犬が描かれ、国宝《鳥獣戯画》乙巻（高山寺）には喧嘩する野犬た

ちが、戯画化されて素描されている。さらに死後肉体の朽ち果てる様子を冷徹に解剖した《九相詩絵図》（12世紀、東京国立博物館）■04でも、腐乱して骨の見える美女の死体を漁る犬たちの浅ましい姿が、克明に描かれている。後の時代のこととなるが、俵屋宗達の《田園早春図》には、密かにこの不埒な野犬を換骨脱胎した犬が、取り澄ました様子でちゃっかり存在している（1）。林進氏による指摘である。

国宝《信貴山縁起》（12世紀）では、家のなかから男が棒で突いて野犬2匹を追い払っている図が著名だろう。すぐ横の屋内の棚には紐で繋がれた飼猫が丸くなっており、犬と猫との「身分の違い」が歴然とする。やや時代は下るが、覚如（1270-1351）の生涯を描いた《慕帰絵》（重要文化財・西本願寺）は藤原隆昌の筆と知られ、巻3の冒頭には、家を囲む柵の周囲にたむろする野犬が3匹、白、褐色、黒に描き分けられて、画面を縁取っている。



■02 《餓鬼草子》 12世紀 東京国立博物館



■03 《病草子》12世紀 京都国立博物館



■04 《九相詩絵巻》 東京国立博物館寄託 鎌倉時代

およそ悉皆調査からは程遠いが、以上の
ように、犬という動物が絵画作品の表象
において、重要な主人公として描かれ
ることは、中世には稀だったようだ。ま
たそこには、裕福な家庭での飼い犬の場
合を除けば、優遇されず縁起でもない野
犬のイメージが支配的だ。その背景には、
死穢、産穢、昨入れなどの不浄を嫌う神
道の穢れの意識や、仏教の無常観を際立
たせる脇役として、犬が畜生代表となっ
た事情もあろう。『枕草子』の読者なら
ば、折檻で死んだ翁丸の悲惨な最期を思
い出されるかもしれない。さらに14世紀
になれば、狩りの演習としての「犬追物」
が流行し、囲いに放たれ、鎧矢の騎馬武
者に追い立てられる犬たちの姿は《犬追
物図屏風》（東京国立博物館・17世紀桃山時代）ほかに
残っている。

南蛮舶来の犬から仔犬百態へ

南蛮図屏風も同じ屏風の伝統の延長上
にあるが、ここで犬の描き方が変わりは
じめる。渡来人たちが連れた飼い犬たち
が、克明に描かれているからだ。狩野内
膳（1570-1616）《南蛮図屏風》（16世紀末-17
世紀初め・神戸市立博物館）■05には、舶来の獵
犬が、召使に引かれてご主人様よろしく
悠々と闊歩しており、土着の犬たちが珍
しそうに近寄ってそれを眺めている。こ
うした飼い犬との散歩が流行をみたのだ
ろう、《彦根屏風》（17世紀前半）では、犬を連
れて伊達な装いの若衆が、若い女たちを
誘っている。

犬の散歩は《縄暖簾》（17世紀）から春章
の浮世絵《雪月花》などへ継承される。
江戸時代後期にも、グレイハウンド系の
獵犬が図像として流通しており、秋田蘭
画の絵師、小田野直武（1750-1780）には

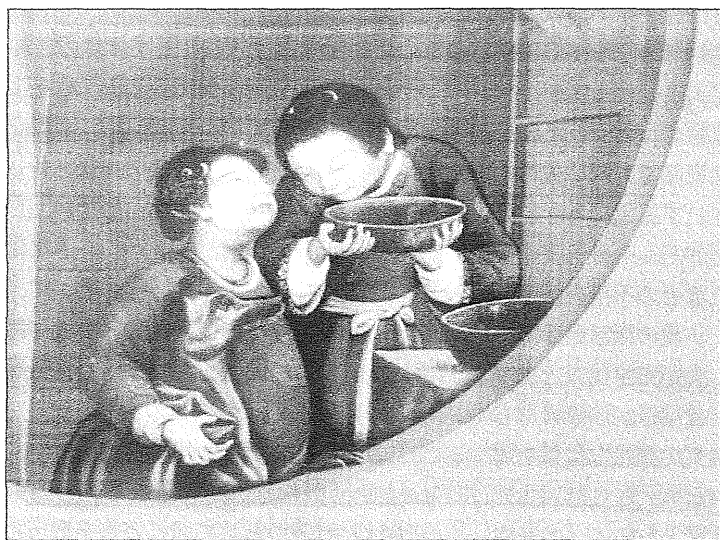
《児童愛犬図》（18世紀後半、秋田市立千秋美術館）

■06が知られる。奇想の画家、伊藤若冲
（1716-1800）の、タイルを散りばめたよ
うな不思議な《鳥獣花木図屏風》（18世紀、
ブライス・コレクション）は、左隻の鳥類に対し
て、右隻の動物界には、正面から描いた白
象を中心として百獣が集うが、右手には
虎や山嵐に挟まれて、犬族代表として、
なぜか巻き尾に鬘を帯びた青い狢犬が鎮
座している一狢犬は、生物学上では分類
不明の珍獣なのだが。

この伊藤若冲には晩年《百犬図》（1799）
■07という異様な図が知られる。百匹の
子犬はどれ一つとして同じ姿勢を取って
いないが、すべてが画面外の鑑賞者を見
つめている。やや先行する曾我蕭白（1730-
1738）にも晩年に《石橋図》（1779）【図3】があ
る。こちらは何匹いるか数える気力もな
いが、無数といってよい仔狢犬が天空の



■05 《南蛮図屏風》 狩野内膳筆 桃山時代 16
世紀末～17世紀初期 神戸市立博物館



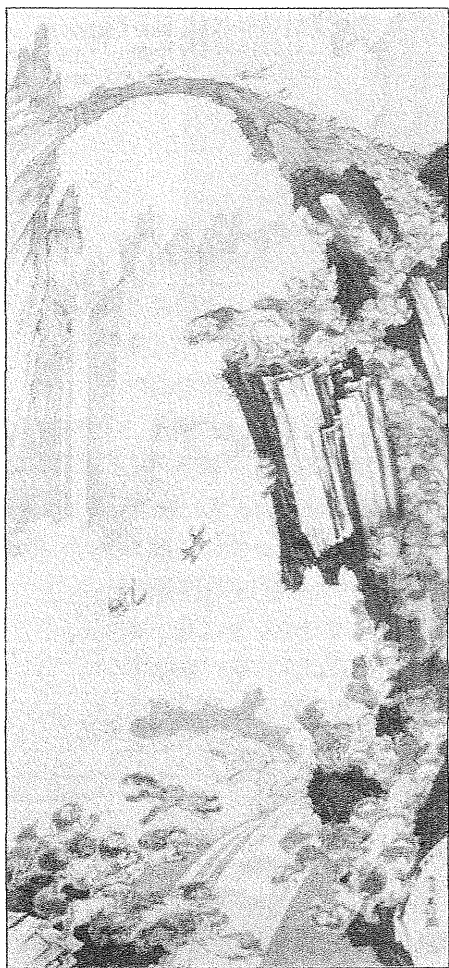
■06 《児童愛犬図》小田野直武 江戸時代 18世紀後期 秋田市立千秋美術館



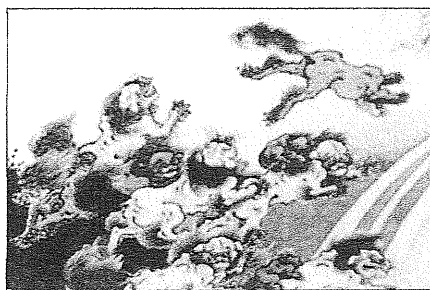
■07 伊藤若沖《百犬図》寛政11(1799)年 個人蔵



■07 (部分)



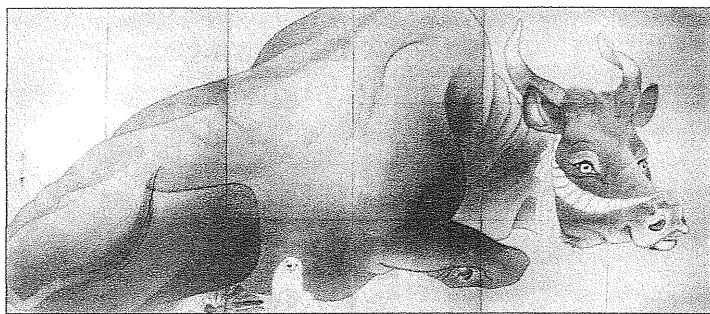
橋を渡ろうと坂道を駆けあがってゆく。
なかには2匹、谷底へと真ッ逆さまに落
ちてゆく哀れな犠牲犬も見える。この両
名と並んで江戸時代を代表する鬼才が、
長澤芦雪（1754-1799）。猿と並んでとりわ
け犬を好んだ芦雪には、犬の家族を主人
公とした作例が多く残される。《唐子遊
図》（1785以前）ほか、お得意の仔犬が、あ
る時には寝そべった巨大な牛の足元に、
意表を突くような有様で座っており（《象と
牛図》[1789以降、ブライス・コレクション] ■09），
ある時は、虎や豹や狼に囲まれて（《群獸



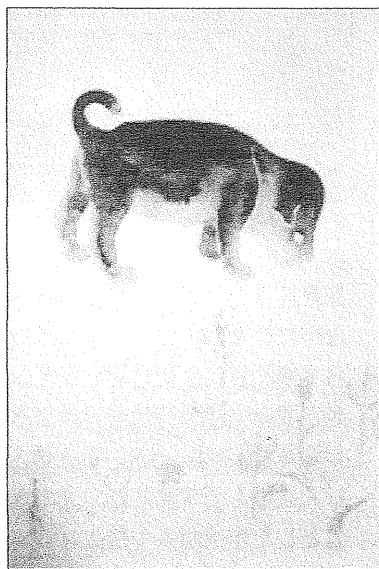
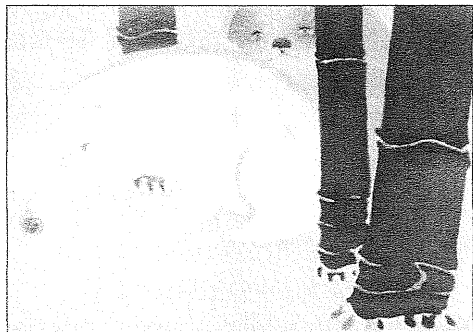
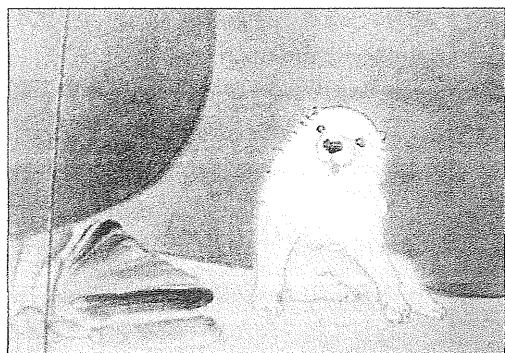
左：■08 曾我蕭白 《石橋図》 1779年 江戸
時代 パークコレクション
右：■08（部分）

図屏風》[1789以降、白浜・金閣寺]）寛いで戯れあ
う。これらの仔犬は人気を博し、画席で
も求められれば即興で披露されたものら
しく、《一笑図》（個人蔵）ほか多くの作例が
今に伝わっている。ここで仔犬たちは、
人間に勝る存在感を示し、画題の主人公
として幅を利かせ、嬉々として戯れ、周
囲に愛嬌を振り撒き始める。もともとは
円山応挙（1733-1795）の《朝顔狗子図杉戸》
（1784、東京国立博物館）■10にも顕著な愛犬趣
味を引き継いだものだろうが、芦雪に
あっては、巨匠・応挙への敵愾心も侮れ
ない。

こうした京都の奇想派の根には、俵屋
宗達の《犬図》（17世紀、個人蔵）■11を挙げね
ばなるまい。墨の垂らしこみの技法で描
かれた仔犬の姿だが、ここには、中国の
水墨画の本流からは離陸し、おそらくは
染織職人の家系ならではの濃淡の量しが、
仔犬の毛並と、肉付きの量感を伝えてい
る。宗達から光琳を経由したこの装飾技
法の伝統を近代京都に再興した神坂雪佳
（1866-1942）には、宗達を近代風に翻案し
た《狗児》■12のような意匠が知られる。



■09 長澤芦雪 《象と牛図》 1789-1802年
プライスコレクション
下：■09（部分）



左上：■10（部分）円山應挙 《朝顔狗子図
杉戸》 1784年 東京国立博物館
右上：■11 俵屋宗達 《犬図（狗子図）》
17世紀 個人蔵
左：■12 神坂雪佳 《狗児》百々世草原画
明治42年ごろ クリーブランド美術館

玩具と石像

ここでしばし話題を転じよう。絵画とは対照的に、玩具や石像では、犬はきわめて頻繁に登場する。玩具については民俗学的調査が不可欠であり、詳細はそちらの章に譲る。ここでは一例に限るならば、例えば嵯峨人形にも「犬」が知られる■13。首と尾が連動して動くカラクリを仕込まれた作例である。年賀記念切手の絵柄に選ばれた玩具を集めなおすだけで、犬を象った玩具の豊富さも理解できようが、残念ながら郵政省発行の記念切手には、どの地方の玩具かの記載がない。石像というのは、ほかでもない神社の境内の入り口左右に立つ狛犬である。正確に言えば、頭部頂上に角があるのが狛犬であり、ないのは獅子だそうだが、このような様式は鎌倉時代の仏師、湛慶によって確立されたという。古代インド起源の獅子が中国を経由して飛鳥時代に日本に伝来し、平安時代には獅子と狛犬として



■13 嵯峨人形 《犬》京都国立博物館



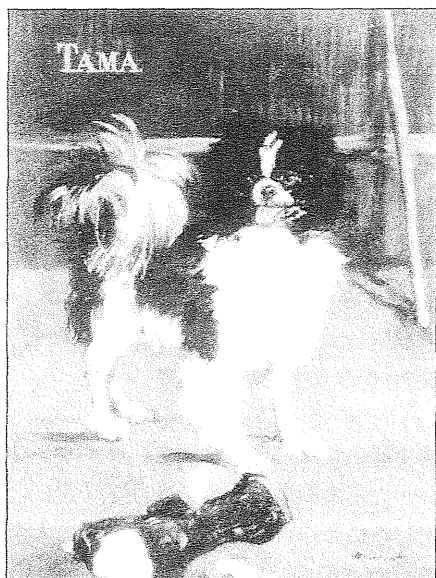
■14 獅子・狛犬 京都 高山寺

対で置かれるようになった。ライオンはいかに日本列島で変容を遂げて「犬」と化したのか。京都・高山寺の一对の木彫彩色の《狛犬》■14は、嘉禄元年(1225)の年記を有する。青銅で作られた阿吽一对の作例は、アンリ・セルヌーシが日本で購入し、パリのセルヌーシ美術館入り口にも安置されており、今日では訪問客を迎えるマスコットとなっている。

西欧に旅した日本の犬

19世紀後半から、日本美術は西欧で人気を博した。そのなかでマネや印象派の画家たちに愛玩された犬が知られる。美術批評家のテオドール・デュレが、先述の銀行家セルヌーシとともに1871年の日本旅行の際、大和郡山で譲りうけ、パリに持ち帰った狆。名前は「タマ」、「宝石」という意味だと注釈がついていた。エドゥアール・マネやオーギュスト・ルノワールに《タマ》■15の肖像が知られ、東洋画のような水墨の運筆を真似て描かれもした。

反対に日本に油彩洋画が定着し、美術学校という機関を通じて教育されてゆくのも、同時代以降のこと。ミュンヘンに留学した原田直次郎(1863-1899)の晩年に



■15 エドゥアール・マネ 《タマ》1875年
ヴァージニア ポール・メロン・コレクション



■16 原田直次郎 《素盞鳴尊八岐蛇退治画稿》
1895年頃 岡山県立美術館

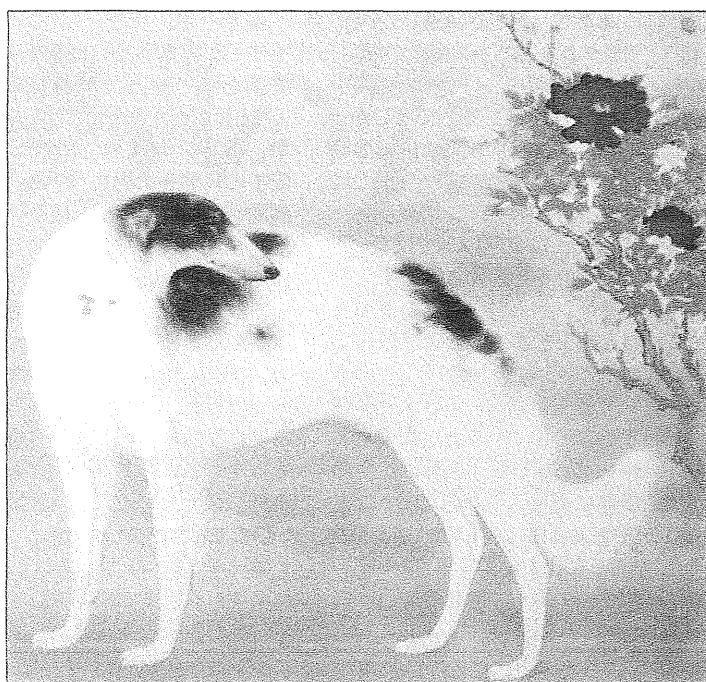
は《素盞鳴尊八岐蛇退治画稿》(1885頃, 岡山県立美術館) ■16が知られる。日本神話から題材をとったもので、完成画は関東大震災により焼失したが、この画稿では、左下の画布が破れ、そこから犬が顔を覗かせるという画中画が、戯れで描きこまれている。西洋の伝統でいえば、ペルセウス神話や聖ゲオルギウスの龍退治に類比できる話題だが、その画面に犬が闖入した。

この先、とりわけ1930年代に西洋の血統書付きと見える獵犬が、日本の画壇に頻繁に闖入する。わずかに数例を列举するに留めるが、日本画では小林古径(1883-1957)に《日長》(1933, 個人蔵)、菊池契月(1879-1955)の《散策》(1934, 京都市美術館)、南画系では橋本関雪(1883-1945)に《唐犬図》(1936, 大阪市立美術館) ■17。選ばれた犬種は順にスピッツ、グレイハウンド、ボルゾイである。「満洲事変」(1931.9.18)

と「盧溝橋事件」(1937.7.7) とに挟まれたこの時期、なぜ洋犬ブームといってもよい状況が生まれたのか。

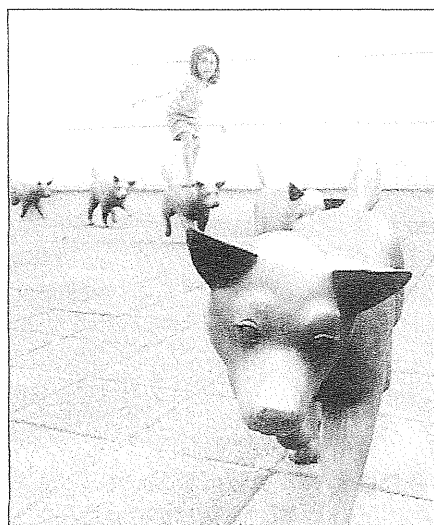
日本人なら誰でも知っている犬

さて、日本でもっとも著名な犬に関する銅像といえば、東京・渋谷駅の駅前にあるハチ公の銅像だろう。「ハチ公前」が待合の合言葉となっているからである。主人であった東京帝国大学農学部教授、上野栄太郎が急死したあとも、定刻に駅頭で主人を待ち続けたという話題が新聞に美談として紹介され、1934年、渋谷駅前に銅像が設置されることとなり、ハチ自らも除幕式に参加した。秋田犬ハチ(1923-35)がその生涯を終えると、盛大な葬儀が催された。安藤照による初代銅像は第2次世界大戦の金属供出によって失われ、終戦後の1948年に占領米軍からの援助も受けて再建された。また出身地で



■17 橋本関雪 《唐犬図》右隻 昭和11(1946)年頃 大阪市立美術館

3



■18 蓼内佐斗司 《犬モ歩ケバ》 1990年 横浜ビジネスパーク

ある大館駅前、秋田犬会館前にも別の銅像が設置されている。日本でもっとも人口に膾炙した公共彫刻だろう。

では現在、日本の屋外彫刻展示でもっとも子供たちに人気のある犬の彫刻といえはのだろうか。蓼内佐斗司の《犬もあるけば》(1990、横浜ビジネス・パーク) ■18であろうか。壁を透過したように出現した犬の列が広場を横切って、別の扉のなかに消えてゆく。1993年には《秋田犬》もお目見えし、96年には《狒犬》も登場し、2009年には——《人待ち犬》。